

# News letter

建築家とつくる家  
個性をカタチに、賢い家づくり。

2026.05 Vol.63

R+house



光を導くミッドセンチュリーの家

物件の詳細情報はこちら [→](#)

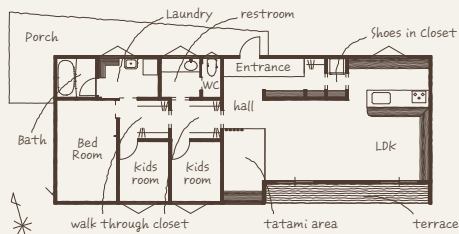


# 非日常を楽しむ住まい

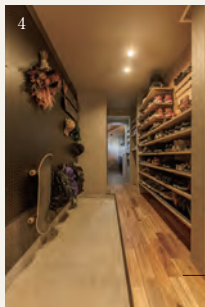
お客様から求められた要望は空間としての“非日常性”と動線や住みやすさとしての“回遊性”でした。両側にはご実家のよく手入れをされた庭があり、その借景をプランの起点としてきわめて抽象的でシンプルなファサードの平屋の佇まいをご提案しました。合理的に通路を省くのではなく、暮らしながら回遊する楽しさを感じられるように、細長いボリュームの中にあえて通過できる空間を散りばめるようなプランとしています。



玄関までのアプローチに奥行きを与え、期待感を感じさせるファサード



好きなお酒を背景に、家族の会話が弾む開放的なキッチンダイニング



各収納空間はすべて、日常の動線として通り抜けができるプランニング



1. 季節の移ろいを感じるご実家の庭を借景にしつつ、視線が合わないような開口部の配置にしています。
2. 道路から見える建物の外観はきわめてシンプルな佇まいとしています。
3. 構造梁をうまく空間のアクセントとし、借景を望む開放的なキッチンダイニングを実現しています。
4. 回遊性をもったSICは通り抜けの動線であるとともにご主人の趣味で溢れています。
5. 外観の印象そのままに、大屋根を感じられる開放的なLDK空間となっています。
6. 薄暮の時間になると温かな照明が軒下を照らし、玄関までのアプローチを演出します。

## 建築家プロフィール

織田 遼平 Oda Ryohei

1984年 神奈川県生まれ  
 2007年 中央大学工学部土木工学科卒業  
 2007年 現場監督として分譲住宅メーカーに勤務  
 2010年 デザインファーム建築設計スタジオ入学  
 2012年 彦根建築設計事務所入所  
 2019年 織田建築設計室 / ODA DESIGN ATELIER設立  
 趣味 音楽、映画、落語





### ブラジルの空に浮く円盤？

十数年前に訪れた、ニテロイ現代美術館(1996年開館)をご紹介します。ニテロイ市は、リオデジャネイロから車で15分程度、湾を隔てた対岸にあります。ブラジル建築の巨匠オスカー・ニーマイヤーによって設計された美術館は、自由な曲線と、花をイメージして生まれた形が特徴的です。岬の先端に建つ個性的なデザインの建物ですが、周辺の日々や自然の風景の中で不思議なほど違和感なく存在します。内部は美術品の展示はもちろん、360°の風景が楽しめるよう設計されており、リオの街を眺めることもできます。地元の人々からも愛されるこの建築は、ニーマイヤーが88歳の時に手掛けた作品。自分自身も、永く自由な発想を持って設計に取り組みたいと感じさせられる経験となりました。

memo

Architect: オスカー・ニーマイヤー

Location: ブラジル ニテロイ市



上: 曲線的な赤いスロープと、宙に浮いた白いUFOのような建物。  
設計者は「花をイメージしてデザインした」と語っています。  
下: 海に突き出した岩場に建つ姿は、ブラジルの明るい風景とよく馴染みます。

小林 剛 Kobayashi Tsuyoshi

アナザーアパートメント株式会社(東京都)  
趣味: スポーツ観戦、散歩



## 建築家 おススメ “ライフ”

### 家庭内部室

よくぞこのコラムに声を掛けてくださいました。ギター、革ジャン、デニム、マンガ…。奥さんが呆れ果てるほどの没入志向と酷い収集癖があるので、この連載は僕だけで回せる自信があります。今回はまずその拠点について。自宅のどまんなかにリビングを押しつけてスタジオを作りました。家の中心に軽音部室。防音仕様ですが、窓を設けてちょっと音が漏れるようにしています。これを書いている今も、三つ子たちの鳴らす音が吹き抜けを通じて聴こえます。どうでもいい音に潜む、彼らの瞬間的な試みが分かります。部室でのさやかな自己探求、そして仲間と何かを企む時間は自らを振り返っても本当に美しいものです。プランのなかに「部室」、いかがですか？



自宅1階の中央にスタジオを設置、そのまわりにリビングがあります



三つ子たちの出す音が漏れ出て家のなかを巡ります



松島 潤平 Matsushima Jumpei

松島潤平建築設計事務所/北海道大学准教授/三つ子の父  
趣味: ギター、レザージャケット・デニム収集、漫画レビュー

## Topics 1 建築家住宅と「間」の新しい関係

編集部  
T.N.



いきなり「間 (MA)」と言われても、ピンとこない方も多いでしょう。「間」とは、日本独特の時空間のあり方です。近代西洋の合理的な捉え方では、時間と空間はそれぞれ独立した尺度と考えられがちですが、日本ではその境界は曖昧です。「時間に間がある」と言い、「空間に間がある」と言うように、私たちは古来より、物と物の「余白」や「関係性」の中にこそ、豊かな意味を見出してきました。

この感覚を世界に知らしめたのが、1978年にパリで開催された展覧会『MA: Espace-Temps du Japon (間：日本の時空間)』です。建築家の磯崎新を中心に、一流のクリエイターが集結し、目に見えない「間」を世界に提示しました。例えば、地鎮祭の「しめ縄」。縄が張られた瞬間に現れる「間」には、物理的な広さを超えた精神的な意味が宿ります。磯崎氏はこれを、20年ごとに建て替えられる伊勢神宮の「式年遷宮」になぞらえました。完成された「物」ではなく、永遠に繰り返される「建てるというプロセス (再生)」の中にこそ、日本の美意識である「間」があると考えたのです。



さて、この独特な感覚を持つ私たちは、現代においてどのような家を描くことができるのでしょうか。日本では「住宅は30年くらいで資産価値がなくなる」とよく言われます。もしかすると私たちは、「形あるものはいつか壊れる」という「間」の美学を、家を短期間で建て替える無意識の理由にしてしまっているのかもしれない。しかし、今の時代、その移ろいやすさが単なる「使い捨て」の言い訳になってしまうのは、あまりに寂しい気がします。性能という「確かな品質」で家を守り、建築家が描く「間」で暮らしを彩る。そんな、時を経るほどに愛着が湧く住まいに、皆さんならどんな「間」をデザインしたいと思いますか？

## Topics 2 「つぐ minä perhonen」展 時を重ねて深みを増すデザイン

編集部  
M.M.



タンパリンや蝶々のテキスタイルでお馴染みのブランド「ミナベルホネン」。その創設30周年を記念する「つぐ minä perhonen」展(世田谷美術館)に行ってきました。



6エリアで構成された展示、まず最初のエリアでは、ミナベルホネンの代表的なテキスタイル約180種を集めた「お花畑のようなインスタレーション」が目飛び込んできます！一気にテンションが上がり、続くエリアへ。ここでは、各デザインがどのように生まれたか、デザイナーの発想のヒントや創造の過程を実物と共に知ることができます。

次は、テキスタイルを支える協業各社の仕事を紹介するエリア。彼らは決して下請け業者ではなく、ミナベルホネンのプロダクトと共に創造する重要な存在であることが

わかります。特に、繊細な刺繍に携わる職人が語る映像では、その仕事に懸ける情熱に胸が熱くなりました。

最後は、経年劣化等で着られなくなったお気に入りのミナベルホネンの服を、デザイナーがメイクしたビフォーアフターの実物を見られる夢のようなエリア！思い出の詰まった家を、今の暮らしに合わせてリノベーションするのと似ているかもしれません。

ミナベルホネンは、服に限らず、家具や器のデザイン、店舗や宿の空間ディレクションも行っています。例えば、椅子の張地「dop」は、擦り切れたら張り替えるのではなく、表地の下から別の色が現れるという、経年変化を積極的に楽しめる心憎いデザインです。

展覧会を通して感じたのは、誠実なものづくりを貫くミナベルホネンの真摯な姿勢です。人と人、人と物、時代と世代を繋げていくデザイン。「つぐ」というタイトルに納得して会場を後にしました。

